

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ボリス・ヴィアンの『公民論』 : 《une po-éthique》のために
Author(s)	原野, 葉子
Citation	フランス文学 , 27 : 52 - 64
Issue Date	2009-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041099
Right	
Relation	



ボリス・ヴィアンの『公民論』 —— « une po-éthique »のために ——

原野 葉子

1950年代初頭、実存主義の熱狂にもいつしか翳りが兆しはじめたパリで、ボリス・ヴィアン(1920-1959)はひっそりと、ある哲学的著作の執筆に着手している。1959年、作家の突然の死とともに未完のまま残されたその断片的な草稿には『公民論』*Traité du civisme*のタイトルが付されていた。¹⁾ その形式が、ヴィアンによって計画された唯一の理論書であったこと、またその主題が、大衆の啓蒙と社会構造のラディカルな変革を企図するものであったこと、さらにまた、その構想を速筆の彼がおよそ9年もの歳月をかけて温めつづけたことにおいて、『公民論』は異形のテキストと言ってよい。

発見された70枚の不均質な草稿は、全資料をトランスクリプションし、詳細な注釈を加えたギイ・ラフォレの博士論文をもとに、1979年、一冊の書物として刊行された。草稿の大部分が乱雑なメモやプランに過ぎないためか、あるいはその専門的な内容のためか、『公民論』について、従来のヴィアン研究ではその存在のみが逸話的に語られるばかりで、テキスト自体の分析はほとんどなされてこなかった。だがわれわれの考えでは、生成の端緒についたばかりのこの「謎めいた作品」²⁾は、ヴィアンの関心の多面性の証左である以上に、彼の創作活動の捉えがたい多面性そのものをひらく、ひとつの鍵であるように思われる。そしてそこから、八面六臂の作家ヴィアンが、彼の時代——実存主義時代に占めた特異な位置を読み解くこともまた、可能になるのではないだろうか。

穴倉酒場「タブー」のジャズ・トランペッターとして活躍し、「サン=ジェルマン=デ=プレのプリンス」と呼ばれたヴィアンが、解放後のパリにおいて、若き実存主義者たちの退廃と享楽とを象徴するスター的存在であったことは周知の通りである。だが一方で、彼の文学作品は、その存命中はほぼ完全に黙殺されたままであった。実際、神なき世界の不条理を描き、明日を生きてゆくための倫理を説く実存主義文学が一世を風靡していた時代に、彼が発表したのは、言語遊戯を満載した奇想天外な作品ばかりであった。

では、実存主義ブームの立役者であったヴィアンその人が、なぜ「参加の文学」とはまったく相容れない作品を書き続けたのか。しかも、いったいなぜ、非現実的でパロディに満ちた、一見軽薄ですらある作品を、戦後の混迷期にあえて世に問い続ける必要があったのか。

そこで本稿では、ヴィアン独自の政治参加の書ともなりえたはずの『公民論』を手掛かりに、彼の社会批判がどのような問題意識に駆動されていたのか、また彼が見据えた倫理とはいかなるものであったのかを明らかにしてゆこう。そこから、つねに脱中心的なベクトルを志向してゆく彼の多彩な創造行為にひそむ、ひとつの戦略を見極めることが可能になるだろう。

労働の廃止＝創造の自由

おそらく 1950 年頃に着想されたと思われる『公民論』に対し、ヴィアンが死の直前まで折に触れ手を加えていたことは、この計画に対する彼の高い関心を証明している。³⁾ 完成稿に程遠い状態とはいえ、作品のおおまかな方向性は、同時代の社会が抱える政治的・経済的な諸問題の検討、そして、科学技術を用いた合理的かつ効率的な解決策の提示であったことが窺える。とくに重視されたのは、実存主義の最大のテーマのひとつでもあった、自由の問題である。

興味深いことに、『公民論』において、自由はつねに労働とともに論じられる。事実、本文の中で大きな比重を占めるのは「自由と労働の章」であり、執筆されたメモの大部分は労働問題に関わるものであった。「総合プラン」を引用しよう。

経済の現況

恐るべき政治的混乱

意味論的混乱

倫理的—宗教的—神秘主義的混乱

そして世界の四分の三の貧窮。

[…]

最終目的：労働の排除

(TC, p.656)

世界が直面する混乱に対し、『公民論』で素描される解決策とは、「明晰な社会」の樹立によって生産の合理化を可能な限り推し進め、人類全体の生活水準を最大限に向上させることであった。そして提案されるどのアイデアも、究極的には「労働の排除」へと帰着してゆく。サイエンス・フィクションの世界を思わせる、あまりにも極端な目標設定の背景にあるのは、自由に対する独自の認識である。

最終目標は当然ながら、労働全般、なかでも「奴隸的」と言われる労働（鉱山夫、港湾労働者など）における強制的な性格を、全面的に、あるいは少なく

ともほぼ全面的に廃止することであり、そのようにして、精神または肉体による創造的活動に、つまりは個人の自由に利することである。

これはまったく可能なことだし、しかも早晚実現されうる。 (TC, p.665)

労働をひとつの隷属状態と見なす作家の姿勢は、技師としての彼の特殊な経歴と無縁ではない。彼はグランド・ゼコールのひとつ、パリ中央工芸学校で理系の実学を修めた後、「フランス工業規格化協会」に入社し、そこでほぼ4年にわたって工業製品に関する標準規格の制作を行っていた。規格化 (normalisation) とは、製品に対してさまざまな角度から正常 (normal) の基準値を設定する作業である。規格の導入は大量生産を可能にするため、20世紀初頭、資本主義の急速な発展に伴って、規格化の動きは全世界的に広がった。しかし一方で、生産システムの全的な統御を至上目的とする規格化の発想が、労働する人間をも互換可能な機械部品と見なしてすべてを生産効率に奉仕させる、近代産業社会の管理体制へと直結していることは言うまでもない。規格化および生産力至上主義体制の非人間的な側面は、『ヴェルコカンとプランクトン』*Vercoquin et le plancton* (1946) や『日々の泡』*L'Ecume des jours* (1947)、『北京の秋』*L'Automne à Pékin* (1947) などにおいて、痛烈な諷刺の対象となってゆく。

『公民論』は、労働問題の解決を科学技術による全面的な代替に見出す一方で、科学技術社会の必然的帰結としてもたらされる人間の機械化を否定する。この明らかな矛盾を突くことはたやすい。けれども今われわれの関心を引くのは、彼が画一的な大量生産 (マス・プロダクション) を機能させる原理を利用して、人間の労働=生産活動を、個人の「創造的活動」(ポイエーシス) へと物理的に転換させようとしたことである。自由は個別的な創造の可能性にこそ見出される、とヴィアンは言う。この点に関して、『公民論』に記された以下の一節は示唆に富む。

僕は何を実現したいのか？

ひとつの有効な倫理学、つまり詩倫理学 (Une espèce d'éthique agissante, une po-éthique)。 (TC, p.728)

戦後社会において実存主義がかくも熱狂的に受け入れられた背景には、それが戦前の価値体系の崩壊とともに生の意味を見失った人々に対し、一定の行動規範として機能しえたという事実がある。つまり、実存主義はひとつの倫理学の役割を果たしていたのだと言ってよい。これに対し、ヴィアンもまた固有の倫理学を立てようと夢想していたこと、そしてそれが、制作=創造のための「詩学」(poétique) と文字通

り結びつけられていることは注目に値する。

「実存は本質に先立つ」というテーゼは、個人の全面的な自由を全面的な拘束=社会責任 (engagement) へと転回させ、それゆえの主体的な自己投企を説くものであった。こうした観念上の自由に対し、ヴィアンは個人を物理的に解放する創造の学=倫理学を希求する。だが、公民にふさわしい行動の方向づけをおこなう倫理とはまた、抽象的にひとを拘束する〈規格〉の一形態なのではなかったか。ここに大きな矛盾があり、またわれわれの興味がある。

ならば、社会的な道德の規範は、自由としての創造行為といかなる点で結びあうのか。世を席卷する実存の哲学とは別様の「有効な倫理学」とは、一体いかなるものなのか。では次節において、『公民論』の具体的な議論を、実存主義批判に注目しつつ検討してゆこう。

知的次元から物質的次元へ：個別化の戦略

さて、実存主義批判は『公民論』の主要な柱のひとつを成している。例えば第一章では、実存主義の機関誌とも言うべき雑誌『レ・タン・モデルヌ』 *Les Temps modernes* に対し、いきなり過激な批判が展開される。

そう、だめだとも、『レ・タン・モデルヌ』では不十分だ。あれはやっつけ仕事、短期的、報告書的で、日々の暮らしや、風という意味での時代の空気を切り取ったにすぎない。マッカーシーを倒すためには、ただ一つの方法しかない。奴を倒すことだ。分析などはなんの役にも立たない。[...] マッカーシー⁴⁾は知的に危険なんじゃない、物質的に危険なんだ (Mac Carthy n'est pas dangereux intellectuellement, mais matériellement)。だから、物質的な次元で奴を攻撃しなくては役に立たないのだ。刃物を手にして。 (TC, p.663)

このいささか乱暴な議論には作家自身も躊躇を覚えたのか、このメモには大きく×印がつけられている。だが無視すべきでないのは、ここに示された「知的な次元」から「物質的な次元」へという方向性だ。前節で引いた「総合プラン」の二番目には、現状の社会問題のひとつとして「意味論的混乱」が挙げられていた。そして、この言語に関わる問題解決の突破口として、「intellectuel」な思想から「matériel」な具体的事物への転回が、以後も繰り返し強調されてゆくことになる。

ところで、「意味論的混乱」とはどのような事態を指しているのだろうか。ヒントになるのは「歴史」に関する記述だ。『レ・タン・モデルヌ』の中核を成す哲学的試論が、時事的現象を時代全体の枠組みにおいて捉える抽象的総括を特徴としてい

たことを想起しよう。それらの目的は、混沌とした現実を理性の光で照らすこと、さらに言えば、時代というキャンバスに知的遠近法の補助線を引いてやることにあった。だが、カオス状の世界をコスモスとして表象するこうした作業のうちに、ヴィアンは卓越した知性ではなく、むしろ限りない恣意性を読み取っている。彼にとって、歴史とは非科学的な歴史絵巻 (histoire) であり、つまりは虚構的な物語 (histoire) であるのに過ぎなかった。⁵⁾

あらゆる偏見のなかで最も莫迦げているのは歴史の偏見だと思う。意味作用が、言葉の中味がこんなにくらぐらぐら変わる領域はほかにひとつもない。ひとはルイ 11 世時代のフランスを語りながら、1951 年にフランスと呼ばれるものに対する結論をそこから引き出そうとする。さらに莫迦ばかしいのは、1800 年から 1900 年にかけてフランスは…に向かって進化していった、というような表現だ。フランスは進化していない。ひとは進化しない。別のものと入れ代わったのだ。[…] それ [=歴史の推移] は非連続的なものごとの集積であり、「進化」が概念として抱かせるような連続性を示したことはかつてない。人間は分割できない=人間は自由な状態で存在可能な思考物質の最小粒子である。歴史は進化としてではなく、統計データの一列と見なされなくてはならない。

(TC, pp.726-727)

ここで歴史は「非連続的なものごとの集積」として、さらに人間は「思考物質の最小粒子」として、いずれも物質的な様相において捉えられている点に注意しよう。抽象的な言葉は現実にかかる出来事の生き生きとした非連続性を蔽いかくす。つまり、対象のひとつひとつが持つ個性を捨象し画一化してしまう。知的な言葉によって、個別的な事象の一般化が簡単に行われてしまうこと——その恣意性に対して作者がきわめて意識的であったことは、1948 年のある講演での発言にも明らかだ。

[…] いかなる存在も唯一のものである以上、いかなる分類のころみも袋小路に帰着することは明白です。したがって普通名詞というのは、実際には、大なり小なり恣意的に特定された一群の唯一物の、言葉の上での結合であることが分かります。[…] 数なるものは、唯一のものごとのまったく主観的かつ幻覚的な重複なのです。⁶⁾

同様の観点から、『公民論』もまた、抽象的な「人民」ではなく具体的な「個人」を対象とすることを目指す。厳密さを旨とする科学的なアプローチによって、個人個

人の幸福を実現しようという壮大な野心は、「序文素描」の冒頭で高らかに宣言されている。

現在の世界人口…。

だが現在の世界人口などというものは存在しない。そのなかに抽象的なものなどなにもない。およそ 26 億人の個人がいる。その個人個人に対して取り組むことは可能だし、そうするべきだ。われわれに関心がある視点から見れば——そして明確を期すために、われわれにはそれだけが唯一有効な視点だと思えるということをただちに強調することになるだろうが、科学的な視点から見れば、さほど大きな数ではない。

大事なのは万人の幸福ではなく、ひとりひとりの幸福だ。 (TC, p.659)

こうした姿勢の裏にあるのは、個人としてではなく顔のない不特定多数として組織化された大衆が持ちうる、巨大な暴力への認識である。その顕在化がファシズムであり、第二次世界大戦の総力戦であったことは言うまでもない。『公民論』中の断章「悪いのは下っ端だ」(« Le lampiste est le vrai coupable »)には、個人を無名化する総称的な「人民という名」(« le nom du peuple »)に潜む危険が、ユーモアを交えつつ描き出されている。

兵士を持たぬ将軍は危険だろうか？

警官を持たぬ警察署長や警視総監は？

枢機卿、大司教と司祭を持たぬ教皇は？

そういう面々なら、わたしも大歓迎だ。

イギリス人はよく知っていたのだ、権力を持たぬ王様が素晴らしく無害だということ。

だが下っ端は実動勢力だ (Mais un lampiste est une force agissante)。

[…]

ヒトラーひとりだけ！素晴らしいスペクタクルだ。だが奴が 8500 万の下っ端を従えとなれば冗談ではすまない。ヒトラーは死んだが、下っ端どもは生き残り、無害な風をしてすまそうとしている——世界中の他の下っ端のように。下っ端どもはお互いを嫌いぬいている。だが集団になれば、奴らは人民の名を持ち無敵となるのだ。

人民の個別化だけが下っ端に対する唯一の防御策だ。 下っ端はそれをよく知っている。 (TC, p.676)

「実動勢力」(une force agissante)としての「人民」に対して差し向けられるべき「有効な倫理学」(une [...] éthique agissante)とはなにか。この問題に対して、彼は何よりも個人の個別化を提案し、個人や個別的事象をほしいままに一般化する「全体主義的」な言葉の用い方に異議を申し立てる。

このように、『公民論』の議論は、同時代の理論的言説の内容というよりも、言語使用そのものの是非をまず争点としている。なぜなら作家にとって、それこそが現実的かつ本質的な社会問題として認識されていたからだ。

言語の記号性を問い直す

同時代を特徴づける「普遍化のディスクール」に対するヴィアンの批判的意識は、アルベール・カミュの『反抗的人間』*L'Homme révolté* (1951)の読書メモにも明確に現れている。

政治と芸術を扱った哲学的エッセイである『反抗的人間』は、発売当初から話題を呼んだ。殺人をもたらす革命に対する懐疑を表明したその反左翼的な内容が、いわゆるカミュ=サルトル論争⁷⁾を生んだことは周知の通りである。一方で、ヴィアンの感想は以下のようなものだ。「この本からは、僕の心を深く動かすものは何も得られないようだ。それがこの本の限界だ。[...]一般化するのは安易すぎるし、意味がなさすぎる。私自身に立脚するのが最小限の誠実さというものだ (TC, p.725)」。

哲学的著作における作家の倫理とは、理論の誠実さ以前に、まず理論化する際の誠実さに見出されるものなのではないか。こうした考え方は『公民論』の語りの構造に直接反映している。風変わりな作者名に注目しよう。「ジュール・デュポン／旧従軍兵士——予備役隊長／教育功労賞佩用者／パリこうのとり保険会社部長 (TC, p.639)。「レットテルが個人に都合よく取って代わる」⁸⁾ 当時の風潮をなぞるかのようになり付けられた名詞の作用によって、いかにも平均的な市民のイメージを帯びたデュポン氏は、一人称で堂々と宣言する。

私はあなたがたに私自身について語ろうと思う。というのも私は平均的な市民の完全な祖型であり、また知的であると自己評価する者だからだ。(TC, p.653)

こうして、『公民論』の理論はつねにある特殊な主観性から出発しているということが読者に明示される。デュポン氏の胡散臭さは、理論的言説に内在する胡散臭さであり、同時に、作家に要求されていた「誠実さ」に対しての、ヴィアン流の応答な

のだと言えよう。『反抗的人間』についての読書メモには、哲学的言語と現実の乖離について、彼の率直な意見が以下のように綴られている。

言葉はすべてではない。やっぱり、あなたがた自身のものではなく、感じる前に理解した気になってしまうような衝撃的な言葉の配列に、惑わされていてはいけないのだ。アンガージュマンは結構なことだが、しかし、サインをする前には申込用紙をきちんと読まなくてはならない。それが気に入らなかつたり、正当だと思えないときには、自分に使える材料から自分用のを編み出す以外、どうする方法があるだろうか。[...] だから僕は、あらゆる意識は他の意識の死を望む、というようなスローガンに与することができないのだ。⁹⁾ というのも、ある純粹意識にとって、そうした欲望、そうした意志はまったく観念的なものだろうし、それゆえ定式化もできないだろうからだ。人間を意識に還元できないのと同じく、人間相互の関係を意識間の関係に還元することはできない＝モノがあるからだ。(TC, p.726)

問題は、たんに哲学や文学の領域に留まるものではない。「曖昧模糊とした駄弁」¹⁰⁾ の氾濫はヴィアンにとって、同時代の社会全体に関わる重要な問題として認識されていた。「新聞の中、あらゆる読み物の中、いたるところで今、選挙演説を思わせる最悪の状態の言葉のインフレーションが起こっている」。¹¹⁾

この表現が直ちに想起させるのは、サルトルの指摘した「文学のインフレーション」である。彼は、実存主義の熱狂的な流行の中で、個々の作品の内容が捨象され、作家の評判だけが独り歩きする現象をそう呼んだのだ。サルトルはそれをおもに読者層の問題ととらえ、マス・メディアを利用して、読者層を安楽なブルジョワ階級から労働者階級へと拡大する道を選択した。ここには「praxis (プラークシス) の文学」の実現を読書行為の生産性に賭け、メディアの再現=表象機能を最大限に活用しようとするサルトルの姿勢が如実に反映されている。

これに対し、ヴィアンが目したものは、媒介し、代理し、表象する、恣意的で不透明な記号としての言語のあり方だった。このような問題意識は、アルフレッド・コージプスキー¹²⁾ が提唱する一般意味論の明らかな影響下に生まれたものである。

「地図はそれが表象する領土ではない。[...] 言葉はそれが表象する対象ではない」。

¹³⁾言語の象徴作用に注意を呼びかけ、現実生活と言葉を適切に結びつける原理を説く一般意味論に、理論嫌いのヴィアンが例外的な共感を寄せたことは特筆に値する。彼はしばしば友人に語ったという。「言葉が造りだした文明に決着をつけなくてはいい

けない、そこから、脱出しないとイケないんだ」。¹⁴⁾

ならば、その脱出の手立てはどこに見出されるのか。その具体的な指針を『公民論』に見出すことは困難だ。とはいえ、方向性を示していると思われるのは、彼が理論的支柱としたもうひとつの知の体系「パタフィジック」'Pataphysique'である。アルフレッド・ジャリが発見した「想像力によって解決する科学」¹⁵⁾の熱烈な信奉者であった彼は、1948年に設立された「コレージュ・ド・パタフィジック」においても中心的な役割を果たしている。厳密な形式主義と奔放な遊戯精神によって、あらゆる価値体系を空転させてゆくその論理は、『公民論』における「個別化」の戦略の基盤と言ってよい。そして、『公民論』からヴィアンの創作活動全体を見渡すとき、そこに一貫して言語の「個別化」の、つまり言語遊戯の軌跡が浮かび上がってくることは示唆的である。ならば、言語の一般規則を逸脱してゆく彼の言語遊戯に、「規範を解体するという規範」の実践による、全体化への抵抗を認めることは不可能だろうか。

言語遊戯と「po-éthique」

言語によって言語を問い直すことの限界、倫理という規範によって自由を実現しようとすることの矛盾を、おそらくヴィアンは意識していた。¹⁶⁾彼の「po-éthique」(詩-倫理学)が理論として完成されることがなかったという事実は、それゆえ必然であったようにも思われる。ただ確かなのは、『公民論』の議論から、言語遊戯者としての作家の「誠実さ」が見えてくることだ。『反抗的人間』の読書メモを引こう。

僕はずっと以前から、それこそ物心ついてからずっと考えていることを考えているような気がする。言語的な材料(matériel verbal)、他人との「コミュニケーション」の材料がわれわれに備わってゆくのは生きた経験の成果としてであり、そしてその経験の成果がすこしずつ豊かになってゆくことで、われわれはつねづね漠然と感じていたことを定式化できるようになるということだ。

(TC, p.726)

われわれが先に指摘した、「intellectuel」ではなく「matériel」な次元へのまなざしが、ここでは言語記号そのものに向けられていることが確認される。重要なのは、言葉を具体的な「matière」ととらえる視点が、『公民論』のはるか以前から、作家の変らぬ言語観であり続けていたことだ。1947年に発表された小説『日々の泡』の序文はその証左である。

人生で大事なものは、どんなことにも先験的な判断をすることだ。実際、間違ってるのは一般大衆のほうで、個人個人はいつも正しいように見える。ここから行動規範なんかを引き出したりしないように用心せねばならない。従うためにわざわざ規則が定式化される必要はないのだ。ふたつのものだけがある。恋愛、あらゆる流儀の、かわいい女の子たちとの恋愛。そしてどちらも同じものだがニュー・オリンズの、あるいはデューク・エリントンの音楽。残りはすべて消え失せるべきだ、だって醜いんだから。その例証が以下の数ページであって、すみからすみまで僕の想像によるものだからこそ、完全に本当の物語であるという事実最大の強みがある。物語のいわゆる物質的な現実化とは、傾斜して熱せられた雰囲気の中で、不規則に波打ち歪みを見せている基準面に現実を投影することにある。おわかりのように、これがぎりぎり打ち明けられる手順だ。¹⁷⁾

末尾近くに示される、創作の「手順」に注目しよう。実験のごとくに語られる小説作法には、ヴィアンの奔放な想像力の秘密を垣間見ることができる。「物語を物質的に現実化」する「不規則で歪んだ基準面」とは、媒体あるいは支持体となる物質、つまり言語と解釈されうるだろう。したがって、彼の作品世界に自由に流入してくる非現実的な要素は、本質的に言語から発生したもの、正確に言えば言語というマティエールの歪みから発生したものということになる。

実際、『日々の泡』には慣用表現のパロディ、駄洒落、造語など、言語記号の形式的側面 (signifiant) に関わる遊びが満載されている。それらは言語のマテリアルな記号性をみずから照射しているだけでなく、個人個人が自由に例外的な世界を創出することを可能にする、特権的なマティエールとしての言語の可能性を示しているだろう。彼が「自分用に編み出した」言語遊戯とは、言語の形式的側面を操作するという点において「科学的な厳密さ」を持ち、また言語の恣意的な記号性をクローズアップするという点において「誠実な」、創造の原理なのだと言える。

一方で、言語を遊戯の素材として扱うことの道理が、『公民論』と深い関わりを持つテキストに言明されていることを見逃してはならない。そのテキストとは、1959年に発表された戯曲『帝国の建設者』*Les Bâtisseurs d'empire* である。主要登場人物のレオン・デュボン、非の打ちどころなき一般市民であることを自任するこの尊大な父親の名は、明らかに『公民論』の作者から引き継がれたものだ。さて、『帝国の建設者』の第三幕は、デュボンの長大な独白で成り立っている。現実から目をそむけ、ひとり空論をとうとうとまくしたてる彼がふと、正気に返ったかのように発する次の言葉は印象的である。

こんな純粹の思弁に時間を費やすなんてのは間違いだな。その間にも手に触れられる、耳にも聞こえる、一言で言えばわれわれの感覚器官で把握できる現実を検討できるだろうに。というのも、時として、わしは言葉で遊んでいるのではないかってふと思うことがあるからだ。

(問 — 窓から外を見やる)

だがもしも言葉がそのためにつくられているのだとしたら？¹⁸⁾

理論ではなく実践として、解答としてではなく問いとして、そして普遍化をめざさない言語遊戯として。ヴィアンはそのようにして日常言語の自明性を柔らかに解体しつつ、創造の自由、自由としての創造を縦横無尽に展開していった。時代の意味=方向それ自体よりも、時代の意味=方向を産出する記号の体制の方に強い関心に向けていたという点において、彼の問題意識はきわめて先鋭的であったと言える。確かに、彼の実存主義批判と言語遊戯の方法論は時宜を得ないものであった。だがそれは同時に、ヴィアンもまた、自分が状況づけられた時代を真剣に考え抜いた作家のひとりであったという事実を、明白に証拠だてていると言えよう。

注

1) Boris VIAN, *Traité du civisme* ; édition revue, établie, préfacée et annotée par Guy LAFORET, dans *Œuvres*, tome 14, Fayard, 2002, pp.639-768. 以下、TC と略記し、引用は本文中のカッコ内に直接ページ数を示す。また拙訳の引用中の強調傍点は原文（イタリック）、下線は筆者による。

2) 評伝『ボリス・ヴィアンの平行的人生』の中で、『公民論』の存在とその概要を初めて明らかにしたノエル・アルノーの表現。Noël ARNAUD, *Les Vies parallèles de Boris Vian* ; nouvelle édition augmentée de nombreux textes inédits, Christian Bourgois, 1981, p.375.

3) 例えば、コレージュ・ド・パタフィジックの運営陣に宛てられた 1956 年 8 月 3 日付の手紙の中に、『公民論』に触れた一節が見られる。

「なみなみならぬ精力を注ぐに値するような計画、僕の『公民論』を温めているところです。執筆にかかるつもりです」。

Boris VIAN, « Boris Vian dans le Collège de 'Pataphysique », in *Dossiers Acénonètes du Collège de 'Pataphysique*, n°12, 87 E.P. (vulg.1960), p.21.

4) ジョゼフ・マッカーシー Joseph McCARTHY (1909-1957) : アメリカ共和党の上院議員。第二次世界大戦後の熱狂的な反共運動、俗に言う「赤狩り」(マッカーシズム)の代表。

5) こうした歴史=物語の構築への欲望が、サルトルの創作の基底に見出されることは言うまでもない。『聖ジュネ、役者にして殉教者』 *Saint Genet, comédien et martyr* (1952)、『家の馬鹿息子』 *L'Idiot de la famille* (1971) 等の伝記的著作は勿論だが、『嘔吐』 *La Nausée* (1938) においても、主人公アントワーヌ・ロカンタンが準備中だった歴史の博士論文を断念して、物語の実作に向かったことは示唆的である。

6) Boris VIAN, « Approche discrète de l'objet », dans *Œuvres*, tome 14, *op.cit.*, pp.358-359.

7) サルトルの弟子フランシス・ジャンソンが、『レ・タン・モデルヌ』1952年5月号において、カミュの非共産主義的立場を批判、『反抗的人間』を失敗作と断ずる。これに激昂したカミュがジャンソンへの反論を同誌8月号に寄せたが、そこで批判の標的にされた編集長サルトルがさらに反論を行い、論争は激化した。

8) Boris VIAN, *Traité du civisme* ; présentation, notes et commentaires de Guy LAFORET, Christian Bourgois (coll.« Le Livre de poche »), 1996, p.121. 『公民論』のこの版は、草稿のトランスクリプションに膨大な注釈を加えたラフォレの博士論文を母体とするものである。なお、『ヴィアン全集』版では、ラフォレの注釈の大部分は割愛されている。

9) ここで取り上げられたヘーゲルの銘句は、『反抗的人間』で言及されるだけでなく、ポーヴォワールの『招かれた女』のエピグラフともなっている。ヴィアン研究者マルク・ラップランドの指摘を参照 (Cf. Marc LAPPRAND, *Boris Vian la vie contre*, Les Presses de l'Université d'Ottawa-Nizet, 1993, p.153)。

10) Boris VIAN, *Boris Vian en verbe* ; présentation et choix de Noël ARNAUD, Pierre Horay, 1970, p.67.

11) *Ibid.*, p. 57.

12) アルフレッド・コージプスキ Alfred KORZYBSKI (1879-1950) : アメリカの言語哲学者、論理学者。一般意味論の提唱者として知られる。1946年頃、ヴィアンはA・E・ヴァン・ヴォークトの『非Aの世界』 *The World of Null-A* (1948 ; 雑誌への初出は1945年) を通じて一般意味論を知り、この作品を訳出、ガリマール社から1953年に出版している。なおヴィアンとコージプスキの一般意味論の関係については、Guy LAFORET ; Alain MIGNIEN, « A propos de Boris Vian et de sa Sémantique générale », in *Obliques*, n°8-9, 1976, pp.156-158 を参照。

13) Alfred KORZYBSKI, *Science and sanity : an introduction to non-aristotelian systems and general semantics*, Lakeville [Connecticut], the International non-aristotelian library publishing company, 1933 [4th ed. 1958], p.58.

14) Guy LAFORET, « Avant-dire au *Traité du civisme* », dans Boris VIAN, *Œuvres*, tome 14, *op.cit.*, p. 645.

15) Alfred JARRY, *Gestes et opinions du docteur Faustroll, pataphysicien : roman néo-scientifique*, dans *Œuvres complètes*, tome 1, Gallimard (coll.« Bibliothèque de la Pléiade »), 1972, p.669.

16) 『公民論』には以下のような一節が見出される。「不幸なしかし不可逆的な事実とは、一冊の本に抗議しようと思ったら最強の武器はやはりもう一冊別の本であるということだ(TC, p.743)」。

17) Boris VIAN, « Avant-Propos », *L'Écume des jours*, dans *Œuvres*, tome 2, Fayard, 1999, pp.21-22.

18) Boris VIAN, *Les Bâisseurs d'empire*, dans *Œuvres*, tome 9, Fayard, 2003, p.1090.